

個人蔵《春日若宮祭礼図・鷹狩図屏風》の主題と典拠

水野 裕史（熊本大学）

個人蔵《春日若宮祭礼図・鷹狩図屏風》は、様式や類例との比較などから17世紀後半の作例と判断される。右隻「春日若宮祭礼図」には、春日若宮おん祭が描かれている。ただし、主題を同じくする作例に見られる興福寺の五重塔や御蓋山などが省略され、他の作例と異なる場面が認められる。加えて左隻「鷹狩図」が、春日若宮祭礼と一双の屏風となった理由も判然としない。そこで本発表では、主題とモチーフの解釈を通じて、これらの問題について考えてみたい。

この問題点を解明する端緒となるのが、「鷹狩図」に描かれたモチーフである。「野行幸」という年中行事がある。野行幸とは、鷹狩のために天皇が大原野・北野などの京都近郊の野に行幸することであり、平安時代において流行した行事であった。第三扇に描かれた鳳輦とその周囲の図様が《野行幸図》（宮内庁書陵部蔵）と類似していることから、本図は野行幸をモチーフとしていることが明らかである。さらに大原野への行幸が記された『源氏物語』二十九帖「行幸」の絵画の影響も考えられる。特に第六扇に配された牛車の様子が、源氏物語の一節と一致し、また土佐光信筆《源氏物語画帖》（ハーバード大学美術館蔵）の図様とも近似する。このことから「鷹狩図」は、源氏物語の図様が描かれた大原野への野行幸を主題とする絵画と解釈できる。

さらに、この大原野というキーワードは右隻「春日若宮祭礼図」の図様改変の背景を解釈できる糸口となる。大原野にある大原野神社は慶安年間（1648-1651）に戦乱で失われた社殿を新しく造営した。さらに、途絶えていた大原野祭を再興したことが『大原野祭御再興記』（宮内庁書陵部蔵）などの文献から判明する。しかも春日若宮おん祭を手本とし、大原野祭を再興した可能性がある。大原野神社の創建は桓武天皇が春日大社から勧請したことに由来し、室町時代の儀礼書『公事根源』などに大原野祭は春日祭と同一の祭と記述されているように、大原野神社と春日大社には共通点が多い。このことを背景に右隻「春日若宮祭礼図」とは、春日若宮祭礼図の類例に見られる図様が転用された大原野祭を主題とする屏風であることを言及し、これが理由となって春日若宮祭礼図のシンボルであった五重塔や御蓋山が省略された可能性を指摘する。

加えて「春日若宮祭礼図」と「鷹狩図」が一双の屏風となった背景について、大原野神社の起源と関わっていることを提起したい。大原野神社は、桓武天皇が鷹狩のために大原野へ行幸したことが契機となって創建された。つまり、大原野神社にとって鷹狩とは重要な行事であったと考えられるのである。このことから大原野を想起させる源氏物語の図様が転用された鷹狩図が制作され、それゆえに大原野神社に関連する祭礼図と鷹狩図が一双の屏風となったものと解釈できるだろう。